歴史の原初形態としての呪術神話と
呪誦に於ける「系譜」への関心

池田源太

一

ポリネシアのマオリ人は、長子をことに尊重し、長男のみを以て貴族社会を形成しているが、家族や氏族の長男、乃至部族長等はその社会的地歩を維持する為めには、自家の系譜の暗誦を要求されることがあつたことが多くの調査に依つて報告されている。原始文学が「歌」と「話」の二つの形体を取りながら、多くはこの演出に当つては、神・人を款待し、乃至は我・人共に楽しむ動機を持つているのに比べて、原初的歴史の形態としての「口誦伝承」の中で、ことに系譜的性格を示すものに在つては、寧ろそれが社会的に一つの機能を持ち、これを保持することが、個人・家・氏族・部族・地方団等の負担又は義務となつていることを見る。起源神話というものも亦同様な性格を多分に持つている。

日本の能狂言でも、酢売と蕈売とが商売の格について口論し、その果に、最後の勝敗を決する標準として、その扱う酢と蕈との「系図」の位を持ち出す仕組が取扱われている。これに依れば、推古天皇の禁中に召された酢売が酒を賜わり詠歌までも下されたとするに対し、後者も、「からく天皇」の禁廷に蕈売が召されて、同じ様に酒と歌とを賜わつたというにあり、結局その位は共に朝廷に関連している点、いづれを上位ともしかねたことに終つたが、然しこれは、系図を含めて、物の故事来歴に対する素朴な社会の関心を示すもので、その所謂「系図」も、Family Saga の素朴なる形を具え、王家乃至は族長家の様な公の事柄に関連を持つているとする一般的な形である。

同じ様に「系図」の位争はやや趣は異るが、「羯鼓炮碌」の中の、羯鼓張が、羯鼓の「系図」を古詩に求め、わさなべ売が、炮碌の「系図」を古歌に求めた事の中にも見られる。勿論これ等はいづれも、古代人の所謂「系譜」への関心を其儘残すものではあり得ない

が、素朴な社会が「系図」を要求した事実を反映しているとは言えよう。

かくて、系図を含めての故事来歴は素朴な歴史形態と見られるが、斯るものと関連し、斯るものを含んでいる最も原初的なものとして我々は此処に呪術を取上げることが出来る。

二

一般に、未開乃至古代社会にあつては、事物の起源を究めようとする欲求の形態が存し、この事から系譜的なものに対する関心が強い。この点については、コドリントンがメラネシア人の研究に於て、彼等がポリネシア人に比べて生来の歴史伝承を欠如していることを指摘して以来、ヂョーヂ・ブラウンも、ポリネシアのサモア島人との比較に於て、メラネシアのニューブリテン島人が、種族の歴史に関する知識を殆んど持つていない事に注意し、更に、ロエブ Loeb も、ニウエ Niue 島の調査に於て、家系伝承に関して、太平洋民族間には、ポリネシア型と、メラネシア型のあることを立論した①。斯くて、メラネシア人が一般に、その種族の歴史事実の知識については、著しく貧困であることが知られている。

然しこれ等の考察は、メラネシア人が「系譜伝承」の異様に発達したポリネシア人と比較された場合のことであつて、メラネシア人といえども「系譜伝承」には相当関心を持たざるを得ない事情にあつた事は否定すべくもない。

例えば、族長等の持つ力は、彼に附属している個人的な超自然力たるマナ Mana の力に外ならないのであるが、このマナは、これを具備する人の個人的な性格や、成功・失敗に従い、或は強く或は弱く、変化することはあつても、本質的には祖先より受け継がれた世襲的遺産相続の性格を失わないのである。その故は、コドリントンが報告している様に、メラネシア諸島に於ては、呪術師 wizard・医者 doctor・天気師 weather-monger・予言者 prophet・占卜者 diviner・夢師 dreamer 等いづれも、このマナの力に依つて、その職業的な仕事をしているので、その力の基礎にある知識は、儀式や、犠牲・祈禱の方法に関する知識と同様に財産権を確立しており、父から子、またはその姉妹の子へと伝わつて行く性質のものであるからである②。従つてかかるマナの根底にある知識の伝承は、結局に於ては、かのマリノウスキーの「呪術の伝承」Tradition of Magic の所説に含めて考察せらるべきである。ただ然し、コドリントンは、呪術の世襲相続的性格を一面に於て認め乍ら、また他面では、マナは個人の性能に依つて強くなつたり弱くなつたりするので、呪術に於ける個人的な性格を稍々強く出していたのであつた。これに比べて、マリノウスキーは、ツロブリアンド諸島に於て、呪術が著しく危険

的要素を伴なつた農耕・手工・漁業・戦争・恋愛・造船・天候支配等に見出され、儀礼的仕草と、呪術師の能力と、呪言の三が、呪力を形成しており、就中メラネシアに於ては、この最後の呪言が最も重要な要素であり、彼等に取つては、呪術を知ることは呪言を知ることに外ならないことを見出した。呪術に於けるこの呪言の最重要性は必然的に伝承体、ことに神話と密接な関係を持つもので、ここに彼の「呪術伝承」の説が存立するのである。彼に従えば、呪術は決して創造されたり発明されたりするものではなしに、悠遠の昔からその社会に存在したものである。従つて呪術には、何時・何処で、その呪術が個人の所有に帰したか、または、如何にしてそれが地方集団乃至は家族或は氏族の財産となつて来たかに関する説話が付帯しているのが常である。かかる説話が彼の所謂「呪術神話」Myth of Magic である。而してかかる説話にしても、それは呪術の来歴・伝承に関する神話であつて、呪術の起源の神話ではない。かくて中央オーストラリアに於ても、呪術は神話時代たるアルチエリンガ Alcheringa 時代から伝わつて来ているのであり、メラネシアでも、あらゆる呪術は人間が地下界に住んでいた時代から受け継いだものとなつているのである。またそれより高い文化の社会に於ても、呪術は精霊か鬼神かから奪つたものであるが、ここでも原則として呪術は発明されたものではなしに、矢張り伝承されたものである。彼に於ては、呪術は元来自然に存在したものであるとする信仰はツロブリアンド、乃至はメラネシアに於ける現象たるに止まらず、未開社会の普遍的・一般的性格を具えているのである。[3] 従つて呪術に於ては、これが授受に当つては、些かの取捨・変化をも許されないので、受けた儘を失うことなく、害うことなく、伝えねばならないのである。この意味からしてあらゆる呪術の本質は「伝承的完全」Traditional integrity である。而してその呪力の効果、即ち、不思議な呪咀や技術、戦捷や捕獲、恋愛の勝利等に関する説話から成り立つている神話は、事実呪術の「生きた神話」Current mythology で、呪力の不思議に関する「生きた年代記」Running chronicle であつて、それ等が呪術師の周囲を壘の様に取りまいているのである。[4]

ここには、説話の伝承の不易性とともに、呪術の不易性があり、強い系譜的なものへの関心がある。

勿論呪術に於ける彼の見解があらゆる所に適応性を持つとは考えられないが、呪術の持つている伝承的性格が少くとも基礎的のものであることは認めらるべきである。[註]

〔註〕 アイスランドの説話、ことにイングリング説話 the Ynglinga Saga に於ける呪術の中にもオヂン Odin の呪術は、ここに入門し、その修練に堪え得るものは何人にも到達される言わば知的な性質を持つているが、これと相並んで本質的 elemental な呪術——それは知的というよりは、生れ乍らにして有するも

ので、ニョルド Njord 神よりその子フライ Frey を経て、世襲的に受け嗣がれて、イングリング家の人々に伝わつたもの――のあることが指摘せられていることは、ここに注目すべき事例として取上げられる（Introduction II. of the Norse King Sagas, Heimskringla, Everyman's Lib, 1951, by A. A. D.）。

マリノウスキーのかかる「呪術伝承」の説に依つて、我々が直ちに思い至るのは、我が国の神話に於ける所謂天孫種族の所有に帰した、貧富や、潮の干満、並びに風波を制御する呪力の伝承に関する説話についてである。

古事記では、火遠理命は、妻の父綿津見大神より、「此鉤者。淤煩鉤。須須鉤。貧鉤。宇流鉤」という呪文と、鉤を兄火照命に「後手」に手渡す一種の呪術的仕草と、それ自身呪力を持つている塩盈珠と塩乾珠とを譲り受けている。この事について、日本書紀は、本書では、「陰」に、「貧鉤」と呼ぶこと、及び「潮満瑰」「潮涸瑰」を、第一の一書では、「貧窮之本。飢饉之始。困苦之根。」という呪文を、第二の一書では「貧鉤。滅鉤。落薄鉤。」の呪文と「後手」に投棄与る仕草と、「潮溢瑰・潮涸瑰」、第三の一書では、「大鉤。踉蹌鉤。貧鉤。癡騃鉤。」の呪文と、「後手」に投げ渡す仕草、並に、「潮満瑰・潮涸瑰二種宝物」、及び「用瑰之法」、第四の一書では、「汝生子八十連属之裔。貧鉤。狭狭貧鉤。」の呪文と、鉤を与える時、「三下唾」する仕草、並に「風招」、即ち嘯の法の伝授をそれぞれ受けている。即ち日本神話の海幸彦・山幸彦の説話の中には、種々のモチーフが考えられるが、本質的には、それが一つの「呪術伝承神話」であることに於て諸伝が一致しているということが出来よう。また中臣寿詞が記紀に採録されていない、所謂、「御膳水」の神話を取扱つていることもここに取り上げられる。これに依れば、中臣氏の遠祖、天児屋根命は、その子天忍雲根神を天の二上に上せて、皇御孫の御膳水について天神に請い求める所があつたので、為めに天神は、「天の玉櫛」を授け、これを刺し立て、終夜詔戸を誦したならば、やがて、「由都五百篁」が生い出で、その下に神泉の涌出することを教えた、という事になつている。斯くの如きは、中臣氏が恐らく嘗つて独占していたと思われる御膳水に関する儀礼の起源が、高天原時代に続いているとなす所に、彼氏の王家との関係が悠遠の古にある事を証する説話として相当早い頃から伝わつて来たものと考えられ、これを中臣氏の呪術師的司祭の職能から考えると、彼氏の取扱う御膳水に関する呪術の伝承神話と見ることが出来る。なおこれと同類神話が、御鎮座伝記・御鎮座本紀にも天村雲命と関連して伝えられているが、ここでは呪術的要素が極めて稀薄である。

また釈日本紀では、日向国風土記は、瓊々杵尊が高千穂の二上峯に天降つた際、天暗冥に、昼夜の別なく人、道を失い物を色別する

ことが出来なかつた。時に土蜘蛛大鉗・小鉗二人が、皇孫親ら稲千穂を抜き、籾となし四方に授け散らしたならば、必ず開晴を得るであろうと奏言した。天孫この誨に従つたところ果して天開晴して日月照光したという説話を採録していた様である。[5]

これは所謂天孫族の間に行われた散米呪法の習俗の起源に関するものと解せられるがなお、日向の土蜘蛛の首長の既に所有していた呪法であつたことから、これもまたマリノウスキーの言うがごとく呪法の起源というよりは呪法の伝承に関する説話と見るべきである。

三

伝承世界に於ける斯くのごとき呪術の伝承は、必然的に次の二つの面に於て「系譜」への関心を強める素因を持つている。

その一つは、呪術は祖先伝来の力の綜合であるという点で、祖先の人々と密接な関係を持つている性格を持つているので呪術を行うに当つて、祖先を呼び返してその助力を要請する立場が成立する。而してその二は、対手の力を弱めることはその儘、己の力の増強を意味するものに外ならないので、その為には、対手の祖先を指摘してこれに侮辱的呪文を放す必要から、対手の力の起源を悉知する方法が成立する。

第一の場合については、我々は、マリノウスキーのツロブリアンド群島に於ける祖先の霊バロマ Baloma の研究に教えられる所が少くない。マリノウスキーは、ツロブリアンド群島中、キリワナ Kiriwana のオマラカナ Omarakana 村の呪術、ことにその畑作呪術 Garden magic の調査に依つて、それが祖先の霊(バロマ)と深い関係があることに注意した。マリノウスキーに依れば、彼等は、凡そ十種の呪言を用いる呪術を以て、畑作経営を行うが、その三つまで祖先の霊と関係がある。例えば、その一つのごときは畑の蔓の刈り倒しや、植付けの折の儀式等の間に誦えられる最も重要な呪文で、その初めには、

ヴアツヴイ、ヴァツヴイ、 vatuvi vatuvi (これは何回もくり返す)
ヴイツマガ、イマガ、 vitumaga imaga
ヴアツヴイ、ヴァツヴイ、 vatuvi vatuvi (これは何回もくり返す)
ヴイツロラ、イロラ、 vitulola ilola
ツブグポル、ツブグコレコ、ツブグタキキラ、
Tubugu Polu Tubugu Koleko Tubugu Takikila
ツブグ、ムラブオイタ、ツブグクアイウデイラ、
Tubugu Mulabuoita Tubugu Kuaiudila
ツブグ、カツプアラ、ツブグブグアブグア、
Tubugu Katupuala Tubugu Buguabugua
ツブグヌマカラ、
Tubugu Numakala
ビルマヴアウビルマム
Biluma va'u bilman
タブグムアケンワ、タマグイオワナ、
Tabugu Muakenwa Tamagu Iowana
のごときこれで、この後にはなお長い文句が続いている。これ等の

言葉には、旧い表現があるので、マリノウスキー自身も充分訳出することは出来なかつた様である。然し明らかな点は、ここに繰り返されている、「ツブグ」tubugu とは、「私の祖父達」の意味で、終りの「タブグ」tabugu とは、その単数である。従つて、「ツブグ」及び、「タブグ」の後に来る言葉、ポロ・コレコ・タキキラ・ムラブオイタ・クアイウディラ・カツブアラ・ブグァブグァ・ヌマカラ・ムワケンワ等は、いずれも祖先の名前である。但し最後のムアケンワは一人の祖先の名であるが、他はいずれもその名で呼ばれる祖先の全部の人を意味している。即ち、これ等の名前は、その家乃至氏族の所有に属するもので、他家又は他氏族のものがこれを侵すことの出来ない性質のもので、その系譜の中には、同名の人が何回かあつたことを示しているのである。かかる祖先の名前の長い連鎖で始まる多くの呪文は、それ自身呪詛の力を持つているもので、マリノウスキーは、その調査に於て、天気呪術の呪文十二のうち六、雷呪術の呪文三のうち二、医薬呪術の呪文十九のうち四、漁業呪術の呪文三のうち二を数えている。

而して更に注意すべきは、かかる呪文に於ける祖先の名の列挙は、更に進んで、呪文の中に、神話が理解され、神話の事実と関連あるものが読み込まれて来る事である。

彼に従えば、ラバイ Labai 村のカララ魚 kalala fish の漁期は、毎月、望月後の六日間位であるが、この間漁業に用いられる呪文には、

「ツダヴァ　クル　ツダヴァ　"Tudava kulu Tudava;
イブァ　クル　ワイブァ」　Ibu'a kulu Wailua;"

の様な文句があるが、この「ツダヴァ」とは、この村に関係のある神話的英雄の名である。伝説では、「ツダヴァ」がカララ魚に対して、普通の日にはデンツレカストー群島 d'Entrecasteaux archipelago の大川に棲み、一ヶ月に一度だけ、ラバイ村の海岸にやつて来る様に命じたのであつた。この神話の故事に依つて、「ツダヴァ」の名が呪文の中にあらわれて来るので、この名が無ければ、魚はやつて来ないと信ぜられている。かかる構成を持つ呪文は、雷呪文や他の二三の呪術にも見られると彼は言つている。[8]

かかる呪文は、実は呪術の重要な部分を形成しているもので、遺産相続の線に沿うて伝承世界の文化の不易的要素の一に数えられるものである。ただこれ等は、世代や、年代の序列に従う系譜とは稍々異なるものであるが、少くとも、伝承世界に於ける系譜を含めての故事来歴が、顧られている大きな素因をなしていることは否むべくもない。

四

呪術に於ける系譜的関心の第二の場合については、我々はこれを北欧フィンランドの伝承文学の中に見出すことが出来る。

カレワラの人文英雄であり、呪術師であり、吟誦詩人であるウアイナモイネン Väinämäinen はポホヨラ Pohjola からの帰途、美女ロウヒ Louhi に遭いこれに求愛するが、ロウヒは彼に様々な難事を課するので次々にこれを果して行き、遂に彼女の求めに依つて、船を作つているうちに斧で足に負傷をする。一老人があつてこの傷を治してやろうとしたが、

「私はほかの言葉はよく憶えているが、
どうして鉄が初めて作られたか、
そして生の鉱鉄がどうして出来たか、
その最初の言葉を思い出せない。」

といつて鉄の来歴を知らねば鉄から受けた傷を治す呪文が解らぬと訴えた。ここでウアイナモリネンは、

「私は鉄の来歴と鋼鉄が最初に出来たいわれを、よく知っている。」

といつて鉄の起源を語つて聞かせる。それに依れば

「空気が初の母である。
水が一番年上の兄で、
鉄は季の弟で、
火は兄弟の仲である。
造物者中最も力あるウッコー ukko
天上の神なる彼が
水を空気から分け
陸を水から分けた。
その時には禍の鉄は生れてもいず、
出来てもいず、伸展びてもいなかつたのに。」

と前置きをして、天界の神ウッコーから鉄の錆の母、青色の口をした鋼鉄の養育者たる三人の美女が生れ、この美女の乳が地上にこぼれ落ちて、それが鉄となり、黒い乳の滴つていた所には一番やわらかな鉄、白い乳の流れている所には一番堅い鋼鉄、赤い乳が滴つた所には、伸展びていない鉄があつたといい、斯うして出来た生の鉄は、すぐ上の兄の火を訪れ、仲よくしようと願つたが、火は怒つて立ち上り、弟の鉄をも焼き尽そうとしたので、鉄はしばし沼地の中に身を潜めた。かかる間に鍛冶師イルマリネン Ilmarinen の誕生があり、狼や熊の足の爪で発かれた鉄を見付けて火に入れ金敷の上で敲いたのであつた。」というのである。ウアイナモイネンがこの長々とした来歴を物語つたので、その老人は、「さてこそ私は鉄の来歴と、鋼鉄の悪習とを知つた」といい、元来鉄の大した者でなかつたことから始めて、その生の鉄が鍛冶師イルマリネンに依つてよ

うやく大を致した次第をのべ、結局鉄はイルマリネンの兄ウアイナモイネンを傷つけたという点で自分の親族を傷つけ、これに歯を向けたからには、犬の様に自分の名誉を汚したことになる、と指摘した。ことに同族に対して歯を向けたことは、

「汝の父も、母も、兄弟も、親籍一同賛同することが出来ない。」

という為めに罪悪を形成することになるもので伝承世界に於けるこの関係は、基礎的なものである。この為に鉄の傷は勢力を失うに至つたと見られる。⑦

これに類するものは冒険勇士レミンカイネン Lemminkainen がポホヨラへ旅をする途中彼を悩ます悪蛇に対して言い放す呪文の中にもあらわれている。

「若し自分がおまえの母を探し出すなら、
而しておまえの祖妣を求めるならば、
おまえは二つに裂けるだろう、
オ、卑しき者よ、
おまえは三つに裂けるだろう。
この厭ましき奴。
自分はよくおまえの生れを知つているのだ。
卑しい者よ。
何処からおまえが来たかをも（知つているのだ）此の世の恐ろしき者よ。
おまえの母はスョヤタル Syöjätär で
おまえの親は海の鬼だ。⑧」

のごときこれである。なおこれと同じことは更にレミンカイネンが彼に敵対してポホヨラの女主人から送られた「冰寒(Frost)」に対して投げた呪文の中にもあらわれている。

それは即ち、

「おまえの出自を言つてやろうか。
おまえの名声を知らしてやろうか。
たしかに俺はおまえの家系を知つているのだ。
おまえのおい立ちは俺はみんな知つているのだ。
さても「冰寒(Frost)」は柳の中に生れ、
厳しい気候に育まれたのだ。
ポホヨラの大きな家に近く、
ピメントラ Pimentola の館の近く
いつも罪に汚れた父から生れ、
最も邪悪な母から生れたのだ。
「冰寒」に誰が乳をふくませたか、
熱い日に誰が湯あみをさせたのか。
あれの母には全く乳は無く、

あれの母には全く乳房はなかつたのだ。
その上「冰寒」に乳をのませたのは蝮であつたのだ。
蝮があれに乳をのませ、蛇があれを養つたのだ。
尖頭の無い乳首であれに乳をのませ
乾からびた乳房であれに乳をのませた。
而して北風があれのゆりかごを揺り
寒気があれをなだめて眠らせた。
惨めな柳の深みの中で
揺れている沼の中で」[註]

〔註〕「冰寒」を屈伏させる呪文に関しては、チャールズ・ビルソンは The Popular poetry of the Finns に於て、ロイツルノヤ Loitsurunoja に収められている次の様なものを引用している。

「冰寒よ、俺はおまえに、おまえの起源を歌つてやろう。
おまえの邪悪の家系を言つてやろう。
俺はおまえの邪悪の質をよく知つている。
おまえの邪悪の祖先を知つている。
おまえは、柳の中に生れたのだ。
氷の山々の裂け目の中で。
「荒廃」Devastation がおまえの父で、おまえの母は「顕劣」Dishonour であつた。
蝮がおまえに乳をやり、蛇が乳もない乳房で吸わせたのだ。
北風が揺り動かして眠らせたのだ。
氷雪の結んだ柳の沼地の中の、邪悪の川のほとりで揺つていたのだ。
邪悪の生れ、邪悪の育ち、邪悪があれの心 Mind と気 Spirit であつた。
みんながあれを、やれ「冰寒」Frost とか「懊悩」Anguish とか、
やれ水脹(ミヅブクレ) Blisterer とか、咬傷奴 Biter とか、やれ趾爪の落魂 Bane of Toenails とか名づけるまでには、
無骨な児餓鬼(こがき) Lubber boy は名も無かつたのだ。」

なおこの点については、ビルソンは、ロイツルノヤの第一部が呪師に依つて一般に用いられる呪文の連続であることを指摘し、その例を、呪師が歯痛を治すことを頼まれた場合に取り、これを治すに当つては、地上、空中の善い精霊、あらゆる神と英雄乃至は力ある死者を呼んでその援助を求め、次に自己の力を誇示する呪文を誦し、更にその力を増強する為めに入神忘我の誦文、また呪師職が神聖なことを感示する様な誦文を歌い、その次には、彼が癒せんとする病根たる悪霊の起源の歌を歌うが、此の場合で言えば、歯痛も悪霊の為す所であるから、この呪誦は歯痛の生れ、即ちその出自であり、これが呪術儀礼の中心であることを取上げている。(Popular Studies in Mythology, Romonce and Folklore, No. 5, The Popular Poetry of the Finns, By Charles J. Billson, 1900)

またアイヌのユーカラは一般に文学的叙述に富んでいて、系譜的、

乃至は物の起源に関するものは殆んど見られないが、それでも、我々は、その太刀魚起源説話に於て、これに類する僅かな例を拾い上げることが出来る。それに依れば、狼の子の神と、太刀魚の変形した小男とが一日浜辺で術競べをしての果に、「いざいざ祖先の当てつこをすべし。」ということになり、狼の子は、思いをこらして見るとかねて、オイナカムイが榛の木の爐縁を作つた際に、これが反つてゆがんだので川の中へ棄てたのが、流れ流れて海に入り遂に太刀魚になつたことに思い至つたので、「オイナカムイが、手ずから造られたる榛の爐ぶちぞ、汝は」と言い放つた。太刀魚はその生い立ちをかくも適確に言い当てられたので、「面色土のごとくなりて」海上に覆没し、もとの太刀魚に帰つて遁げ去つた、というのである。⑩ここには、太刀魚の起源という一小事実も、実は造物者の造物の秘事に属するものであるとの暗示があり、かかる天地造物の秘事を知ることは知者の力を増強し、これと反対に己の祖先、乃至は素性を知られることは、己の呪力の失墜を意味していることが示されている。

呪術は未開人の科学と言われている様に人智の未開の特色はこの自然の因果律を無視した呪術であるとも言えるが、かかる呪術に伴なう、而して呪術の中に於ける物の起源乃至系譜的神話は、実際未開乃至古代の社会の智識として彼等の生活の中に常に生きて存在したと考えねばならない。従つてかかる物が彼等の文化の基調に横たわつているとせねばならない。斯くしてそれは我国の古代に於ては如何なる形に於いて現われているのであろうか。

五

古事記の中には、明かに呪術に於ける呪言と見做されるものが含まれているが、就中既に述べる海幸彦・山幸彦の説話中

「此鈎者。淤煩鈎。須々鈎。貧鈎。宇流鈎。」

を初めとして、木花之佐久夜毗売説話に於ける。

「天神御子之命。雖二雪零風吹一。恒如レ石而。石常堅不レ動坐。」

「如木花之栄栄坐。」

「天神御子御寿者。木花之阿摩比能微坐。」

のごときや、秋山下氷壮士、春山霞壮夫説話に於ける

「如二此竹葉青一。如此竹葉茎。而青茎。」

「如二此塩之盈乾一。而盈乾。」

「如二此石之沈一而沈臥。」

等はその最も顕著なものである。前二者の説話は日本書紀もこれを取扱つており、類似の呪言の異伝を種々挙げている。然しこれ等はいずれも言わば Spell「呪言」に属するもので、その中に系譜的な

もの、乃至は物の起源神話的要素を含む余裕は無い。これにひきかえて、我々は呪術的な Chanting「諷誦」、又は Incantation「呪誦」ともいうべきものを我が国の祝詞の中に見出すことが出来、ことに、その遷却崇神祭及び火鎮祭のごときにかかる叙事的要素の含まれていることを見るのである。この二者は、自然神的要素を持つ神を祭る言葉であるから、呪術的性格を有することはもとよりであるが、この呪力増強の系譜的乃至物の起源を取扱うこと次の通りである。

その前者に於ては、

「高天原にて事始めをした神漏伎、神漏美神が、神議により皇孫を此の国に降さんとして、第一に、天穂日之命、次に健三熊之命、次に天若彦を遣わしたが、いずれも返言をしなかつたので、最後に経津主命・健雷命を遣わし、荒ぶる神を攘い鎮め、遂に、『語問いし磐根樹立、草の片葉をも語止めて、』皇孫此の国に降るを得た。」

という、国譲の神話を叙している。健三熊之命の伝は古事記には漏れており、同じ事柄を取扱つた出雲国造神賀詞の伝とも全く異つているところから、この伝は、寧ろ日本書紀に近いとせねばならない。ここには、未だ祖神の系譜的なものは見られないが、邪悪を払つた祖先の神々の業績に関する故事が、今も尚邪悪をしりぞける力を持つているとなす信仰が基礎に無ければその叙述は無意味のものとなるのである。

その後者の場合は、著しく我々はカレワラ、及びロイツルノヤに於ける冰寒制御の呪誦に近いものを見出すのである。これに依れば「神伊佐奈伎、伊佐奈美の命により、国の八十国、島の八十島、及び八百万神が生れ、その最後に火結神の生誕があり、この為めに女神石隠れして、『夜は七夜、昼は七日、吾をな見給いそ、吾が奈妹の命。』といわれた。然るに男神七日に足らずして女神を見た故に、男神は上津国、女神は下津国と分れて知すこととなり、女神既に石隠りして、与美津枚坂に至つたが、思い返して、『吾が名妹命の知し食す上津国に心悪しき子を生み置きて来ぬ。』と言い、帰り来つて、水神・匏・川菜・埴山姫の四種のものを生み、更に、『此の心悪しき子の心荒びなば、水神・匏・埴山姫・川菜を持ちて鎮め奉れ、』と教え悟した。」

というのである。大凡これは、記紀の火神出生の神話と大同小異であるが、なお重要なことは、火の神の出自をのべると共に、これを「心悪しき子」と呼んでおり、これを制御することの出来る、反火神的要素を生んだ点であり、この点記紀共に明瞭さを欠いているにも拘わらず、ここには明かに女神に依り取り鎮められる方法として示されている点で、記紀とは一応独立した神話と見られる。而して

この火神出生に関する神話を誦することは、開闢の時既に火神はこの四種のものに依つて取り鎮められることが約束せられておる為め火神もこの運命に従わねばならぬことを指摘するもので、ここに鎮火祭の呪術としての意味とその呪力の増強が存するのである。然し私はこれ等を以て直ちに、古事記や日本書紀に於ける火神・水神・土神の出生神話や、天菩比神・三熊之大人・天若日子・経津主神・武甕槌神等に関する神話が鎮火祭や、遷却祟神祭の祝詞に見られる叙事的呪誦の部分に依つて先行されていると考えてはいない。それにしても、古事記・日本書紀に採録せられた神統的な部分や、その他の起源神話の中には、嘗つては呪誦として司祭・その他巫女乃至呪師的職能を持つものの口に屢々上つた様なものが含まれてはいないかを疑うのである。[11]

歴史は実にかかる呪誦に於ける自他の出自に対する強い関心の中に発生していることを私はここに指摘したいと思うのである。歴史はこの意味に於て、素朴な社会に生きた生命と、機能を明瞭に持つていたと考えることが出来る。従つて原始文学が人間性に依つて支持せられ情緒的なものを多く持つているのに比べて、原初の歴史は、社会性に依つて支持せられる点が多く、文学的なもの、情緒的なものを伴い乍ら、基礎には、宇宙の謎に関する叡智的なものの上に立つていると考えられて来る。

① 奈良学芸大学紀要第二巻第二号、昭和廿八年三月、拙論、「ポリネシアに於ける口誦伝承の習俗と社会組織」参照

② "The Melanesians, studies in their anthropology and Folklore," by R. H. Codrington, 1891. chap. VII. Magic.

③ "Myth in Primitive Psychology," by Brownislaw Malinowski, 1926, London, Chap. IV. Myth of Magic.
"Magic, Science and Religion," by Brownislaw Malinowski, 1948, Boston, Chap. V. 2. Tradition of Magic.

④ Ibid.

⑤ 釈日本紀巻八。狩谷棭斎著、採輯諸国風土記、古典全集本。

⑥ "Magic, Science and Religion," by B. Malinowski, Chap. V. 2.

⑦ Kalevala, Runo ix, Origin of Iron, Translated by W. F. Kirby 1951. London, Everyman's Lib. Lis No. 259. pp. 78–87.

⑧ Kalevala, Runo xxvi Lemminkainen's Journey, Everyman's Lib. Lis No. 260, p. 18.

⑨ Ibid, Runo xxx. Lemminkainen and Tiera. p. 61.

⑩ 岩波文庫本ユーカラ中、神々のユーカラ、ウウーアテンルテンル。

⑪ 古事記・日本書紀については、新訂増補国史大系本を、祝詞については次田潤氏の「祝詞新講」を各々テキストに用いた。

（廿九・一一・三）